

フランス軍戦力低下一覧表を読み解く(第5-2版)

はじめに：WEUでのフランス陸軍部隊について

そもそも、フランス陸軍部隊の戦闘力はいつの時点に何を基準に算定されたものだろう。ゲームは1939年9月の開戦から始まるものであり、フランス軍の増援表は開戦当初から1940/08サイクルまである。1939シナリオと1940シナリオでは初期配置も部隊数も異なる。これは、その間に増援表に従って増援部隊を得て、前線への部隊移動も行われていることを示している。このことから、1940シナリオ用に戦闘力が算定されているのは確かであるが、1939年の開戦時点を正確に表しているかは疑わしい。

1939年9月の開戦時点での主な機械化戦力は、騎兵科に属する軽機甲師団(DLM)2個と軽騎兵師団(DLC)2個と機械化騎兵師団(DC)3個、歩兵科に属する自動車化歩兵師団(DIM)5個があつただけである。開戦時点ではフランス軍機甲師団(DCR)は編成途上であり、1940年1月からフランス戦が始まる1940年5月までの間に3個のDCRを編成したり、DCをDLCへと改編を予定する(1940年5月までの間に1個のDLCを編成)など、部隊改編を進めていた。増援表に従って登場する部隊には、新規編成部隊だけでなく、DCRやDLCのような改編後の部隊も含まれていることになる。ここで一つの疑問がわく。開戦時点で存在するはずの「改編前の部隊」は、どうなっているのだろう。WEUには、「部隊改編のルール」がない。そのため、初期配置からは除かれ、改編終了後に増援として登場する仕組みとなっているはずである。加えて、歩兵師団ユニットの裏面が「塹壕」というように、うまく活用されているとは言えず、「フランス国境のドイツ軍はゲーム開始時に補充ポイントや部隊統合を行って完全戦力としなければならない」のに、開戦当初からフランス軍の全てが「動員完了状態で開戦ターンを始める」というのも疑問である。

そこで、開戦時に存在したはずの部隊編成とフランス軍の動員状況を調べることになった。参考にしたのは、フランス語版Wikipediaである。フランス語ページをEdgeの翻訳機能を用いて日本語の翻訳させると日本語翻訳能力不足が目に余る。そこでフランス語を英語に翻訳させ、それを参考にして日本語訳を見直しつつ、この稿を作製した。

調査の成果の一つとして、やはり、イタリア国境の山岳部隊は開戦前では大隊規模に過ぎず、その後に動員を受けて師団化していたことが判った。更に調べる内に、一つ驚くことが判った。フランス陸軍の場合、騎兵科に属する部隊は全て2単位編制であった。歩兵科に属する部隊は3単位編制なのだ。騎兵科が戦車や装甲車を装備した機械化部隊を操り、その機械化部隊は全て2単位編制であった。歩兵科は「自動車化歩兵師団」を唯一の機械化部隊としていた。この結果を「戦力段階一覧表」に当てはめると、SPIオリジナルの部隊設定と戦闘力評定には誤謬があるとしか思えない事態となった。なお、以下に示す装備内容はペーパープランを示すものであり、実際の装備状況とは多少異なることもある。

オリジナル・ルールでのユニット評価

unit	名称(name)	駒数
<6-6>/<1-6>BG	Armored Dv. (division cuirassée:DCR)	6
<2-6>/ -	Mechanized Cavlry Dv. (division légère mécanique:DLM)	3

unit	名称(name)	駒数
<1-6>/ -	Light Mechanized Cavlry Dv. (division légère de cavalerie:DLC)	3
<1-3>/ -	Cavlry Dv. (division de cavalerie:DC)	6
<3-6>/ -	Mechanized Inf. Dv. (?)	6
<3-10>/ -	Motorized Inf. Dv. (division d'infanterie motorisée:DIM)	9
<3-4>/<(6)-0>	Infantry Dv./Fortified Inf. Dv. (division d'infanterie:DI)/ (division d'infanterie de forteresse:DIF)	87
<2-4>/ -	Mnt.Dv. (divisions d'infanterie alpines:DIA)	6
<1-4>/ -	Inf.LDv. (division légère de chasseurs:DLCh) (Division légère d'infanterie:DLI)	9
	Cavlry brigade (brigade de spahis:BS)	

フランス陸軍の特徴

フランス陸軍は、騎兵科、歩兵科、山岳科の3科に分かれており、独特の名前と歴史を持ち、編制もそれ異なることにある。機械化も兵科別に進められた。

「突破戦力として培われてきた騎兵科」に重戦車が配備され、ベルギーへの突進は「騎兵軍団」という名のもとで実施された。騎兵科は2単位編制を基本とし、連隊は2個大隊、大隊は2個中隊、中隊は2個小隊、という形で編成されていた。

歩兵科は3単位編制を基本とし、連隊は3個大隊、大隊は3個中隊、中隊は3個小隊、という形で編成されていた。第一次世界大戦の記憶から、再び「最終的には塹壕戦となる」と予想した歩兵科は、ベルギー進軍を予定する歩兵師団を自動車化師団へと改編しただけで、まさに「徒步」で移動する部隊であった。加えて、かつて各歩兵師団にあった「偵察部隊=騎馬歩兵中隊」の多くを「機械化偵察グループ(GR:軽戦車/装甲車、あるいはオートバイ装備)」として軍団司令部付属の軍団偵察大隊(GRCA: 2個中隊4個小隊編制)として集約し、ベルギー進軍を予定する歩兵師団にのみ「装甲車装備の偵察大隊(GRDI: 2個中隊4個小隊編制)」として残していた。ベルギーに進軍したGRはダンケルク包囲に巻き込まれ、失われてしまう。包囲に巻き込まれずに生き残ったGRCAは、軽機甲師団(DLM)の偵察連隊、機甲師団(DCR)や軽騎兵師団(DLC)の装甲車連隊に組み込まれることとなる。いずれのGRも、ゲーム上の戦闘力は0.44(4/9)であり、1CMRに相当する。歩兵師団に付属部隊として追加配属されたGRDIは<1-6>BGでゲームに登場させるのが妥当であり、GRCAは1CMRとしてプールしておくのが妥当だろう。

「イタリア国境地帯での山岳戦闘を考慮して編制が始まった山岳科」は、「軽装備の特殊歩兵大隊」と位置づけられて機械化されず、イタリア国境地帯の配備に限らず、ノルウ

エ一戦へと国外派遣されることになる。山岳大隊は3単位編制を基本とし、大隊は3個中隊、中隊は3個小隊、という形で編成されていた。

北アフリカにあった各兵科所属部隊は、各地域の支配継続のために現地人兵を中心に編成された。一部が1940年初頭にフランス本国へと輸送され、フランス国内戦に参加することになる。

フランス軍全般としての問題点は、軍団レベル以上では無線通信や補給部隊が存在したが、「塹壕戦ともなれば、無線で各部隊宛に指令を発する必要はないし、各部隊独自の補給部隊も必要ない」として、一部の部隊を除いて、無線通信部隊も補給段列も師団以下の部隊には配備されていなかったことだ。戦争の進展に伴い、上級司令部からの指令も得られず、補給もままならない部隊が続出することになる。

フランス軍騎兵旅団(BS)

1939年9月の開戦時、「アルジェリア独立騎兵スパヒス旅団(brigade de spahis : BS) 2個が本国内にあり、アルジェリアにて3個目のBSが1939年9月に新たに編成された。

BSの装備内容は「馬」のままで、ハーフトラック牽引の対戦車砲中隊が付属していた。無線通信部隊も補給段列も配備されておらず、単独行動は不可能だった。1939年10月にアルジェリアから本国に第3BSが輸送された。1940年2月、BS 2個をDLC 1個へと改編が予定されたが、フランス国内戦開始時までには間に合わなかった。結局、改編の機会は得られず、BSのまま戦い続け、休戦とともに降伏した。

BSの基本編成（2単位編成）

第1騎兵旅団

第1騎兵大隊 = 乗馬騎兵2個中隊編制2個大隊
(4個中隊)

第2騎兵連隊 = 同上

その他支援部隊（牽引対戦車砲）

※BSは騎兵旅団1個分(8個中隊)に相当し、装甲車ではなく「馬上騎兵」である。

支援部隊として牽引対戦車砲が存在した。

フランス軍乗車竜騎兵連隊(RDP)・乗車竜騎兵旅団(BDP)

フランス軍乗車竜騎兵大隊は、1939年9月の開戦時までにDC5個をDLCへと改編するために統合され、開戦時点では一つも存在していなかった。しかし、DLC再編前のDCが3個あり、残っていた3個のDC改編のために乗車竜騎兵連隊 (RDP) 2個からなる乗車竜騎兵旅団(BDP)が1939年9月に招集された。12月までに2個旅団(計4個連隊)が編成完結し、その後に連隊単位でその後DLCやDLM内の乗車竜騎兵連隊として統合され、再び存在しなくなった。

これらの部隊をゲーム上のユニットとして登場させるべきかは議論が分かれるところだろう。改編/統合には二つの方法がある。一つ目は、「補充ポイント」としてゲームに登場させ、その補充ポイントを用いることでDCをDLCやDLMへと拡大する。二つ目は、「実際のRDPユニット」としてゲームに登場させ、RDPとDCとを統合してDLCやDLMへと拡大する。二つの方法のどちらも「戦力低下一覧」では反映可能であり、そのように作成

した。同時に、「増援表」にどのように反映させるのか、「ユニット数をどうするのか」という問題でもある。「ユニット数を減らす」という意味では、補充ポイントとして反映させるのが適当だろう。いずれにせよ、今回の見直しで、「フランス軍ユニットの大幅な修正が必要なことは明らか」であり、加えて「新たなフランス軍ユニット数」も合わせて考えるべき事柄でもあり、「戦力低下一覧」だけでは解決できない。

乗車竜騎兵旅団(BDP)の基本編成 (2単位編成)

第1乗車竜騎兵連隊(RDP)=ハーフトラック乗車の騎兵大隊2個(騎兵科)
(1個大隊=2個中隊:1個中隊=2個小隊;4個中隊=8個小隊編制)
第2乗車竜騎兵連隊(同上)

フランス軍騎兵師団(DC) (DLC改編以前の編成)

1939年9月の開戦時、「軽騎兵師団:DLC改変前」の騎兵師団:DC3個があった。DC所属の「Cuirassier:胸甲騎兵」も「Dragoon:竜騎兵」も、名称はそのままである。しかし、装備内容はもはや「馬」ではなく、快速で長距離移動が可能な「騎兵用」戦車や「騎兵用」装甲車などと、名称は「騎兵師団」であっても、実際は「機甲騎兵師団」となっていた。「Cuirassier:胸甲騎兵」連隊は「快速部隊としてAMD35装甲車」が主装備であり、古来からの「Cuirassier:胸甲騎兵」として「先鋒を担う」ことが主任務とされていた。「Dragoon:竜騎兵」は「中心騎兵戦力部隊」として「S35及びH39戦車」が主装備となっており、古来からの「Dragoon:竜騎兵」として「敵部隊の直接撃破を担う」ことが主任務とされていた。1940年2月、残りのDC3個が全てDLCに改編が予定され、フランス国内戦開始時にはDCは存在していないはずだった。フランス国内戦開始時までにDLCへの改編ができたDCは1個だけで、残りの2個が改編できたのはダンケルク戦後のことであった。

DCの基本編成 (2単位編成)

第1騎兵旅団

胸甲騎兵連隊=AMD装甲車2個中隊編成の装甲車大隊2個 (4個中隊)

竜騎兵連隊=戦車2個中隊編成の戦車大隊2個 (第1大隊S35、第2大隊H39装備)
(4個中隊)

第2騎兵旅団 (同上:8個中隊)

その他支援部隊(牽引砲兵・牽引対戦車砲)

フランス軍機甲師団(DCR)

1939年9月の開戦時には2個騎兵旅団(戦車旅団)規模の部隊であったものが、1940年1月にDCR師団編成となり、それぞれ第1・第2DCRとなった。「騎兵科発祥の戦車部隊」と「歩兵科発祥の自動車化歩兵部隊」の混合編成であり、「擬似的3単位編制」だった。騎兵科による戦車や偵察用装甲車の2単位編制による独占装備、2単位編制の大隊を3単位に振り分け直すなど、編成完結までの時間を長引かせる結果となった。1940年3月には第3DCRが編成され、フランス国内戦が始まった後の5月10日に第4DCRが敗残の兵

を集めて編成開始となっている。

DCRは第一次世界大戦の「塹壕戦」の経験から「ドイツ塹壕線の突破」を目的に編制された部隊である。そのため、「ドイツ塹壕線の突破を目的に開発したB1-bis戦車」を集中装備していた。更に「敵塹壕線内の拠点を破壊し、歩兵大隊の前進速度に合わせたゆっくりとした前進」を前提に、「拠点破壊継続のための弾薬補給車の配備」はあっても、師団独自の偵察部隊・長距離無線部隊・燃料タンクローリーなどがDCRには配備されていなかった。そのため、「長距離移動に伴う持続的な燃料補給やメンテナンスができない」こととなった。B1-bisは「戦闘による損失」よりも「燃料不足や故障による戦車放棄」が上回り、第1・第2・第3 DCR所属のB1-bisはベルギー国内での初期の戦闘で全て失われてしまう結果となってしまう。所属兵科が異なる「乗車歩兵大隊」は「置き去り」にされることすらあり、諸兵科連合は全く発揮できなかった。

第4 DCRは、敗残の軽戦車や騎兵・歩兵部隊を寄せ集めての編成であり、「師団」としての統合や連携などの訓練もなしに投入された部隊である。ゲーム上、どのように扱うべきか、議論の余地がある。第4 DCRは、ポーランド戦での「Kempf師団」と同様に、「スタッツによる部隊群」扱いとし、「師団ユニットとしてゲームには登場させない」のが妥当な扱いであると思われる。また、編制途上のDCR2個は、DCRを戦力低下させた状態で登場させる。

DCRの基本編成（擬似的3単位編成）

重機甲準旅団=重戦車2個大隊（B1-bis装備各大隊35輜：補給用装甲車隊付属）

（1個大隊=3個中隊:1個中隊=3個小隊：各小隊3~4輜
；1個大隊は実質2個中隊+1個小隊の実質計7個小隊⇒2個小隊欠
：2個大隊としては実質計14個小隊⇒4個小隊欠）^(註)

軽機甲準旅団=軽戦車2個大隊（H39装備各大隊45輜：補給用装甲車隊付属）

（1個大隊=3個中隊:1個中隊=3個小隊：各小隊5輜
：2個大隊としては計18個小隊：各小隊5輜）

乗車歩兵大隊 =乗車歩兵3個中隊(歩兵科のまま転属)

その他支援部隊（牽引砲兵・牽引対戦車砲・乗車工兵）

※偵察・通信・持続的な補給部隊は編制内にない(上位の軍団司令部直轄部隊に依存)

註：各戦車小隊は定数が5輜であり、「1個大隊=2個中隊=4個小隊」という2単位編制大隊全体では4個小隊20輜が装備されていた。2単位編制大隊2個を配下に持つ戦車旅団は8個小隊40輜の装備となる。1個戦車旅団に対して5輜(1個小隊)の増援を与えて9個小隊45輜とすると、「1個大隊=3個中隊=9個小隊」の3単位大隊編制が可能となる。H39戦車は量産化が進んでおり、そのような部隊再編に対応可能であった。しかし、B1-bis戦車はそこまで生産が進んでいなかった。そもそも、大隊定数45輜に対して35~34輜しか準備できず、実質2個小隊分(10輜)が不足していた。結局、B1-bis戦車1個小隊の装備数を減らして1個戦車小隊4~3輜とすることで「1個大隊=3個中隊=9個小隊」の3単位大隊編制となっている。このように各小隊の装備数を減らして「1個大隊=3個中隊=9個小隊」へと割り振り直すことを、「擬似的3単位編制」とこの稿では言うこととする。「擬似的3単位編制」では「本来あるべき完全戦力(5.00)

に満たない」ため、「本来の完全戦力に対する不足分(0.44)を初期配置段階で戦力低下」させなければならないことになる。その上で、部隊統合を含め、DCRの各戦力段階を決定した。

フランス軍軽機甲師団(DLM)

1939年9月の開戦時、騎兵師団から改編済みの軽機甲師団：DLM 2個があった。1940年2月、第3 DLMが編成され、続く部隊の編制も予定されていた。 DCRのように歩兵科の「自動車化歩兵大隊」と編合するのではなく、「騎兵科だけでの再編成」を目指したものがDLMである。

戦車装備の騎兵旅団2個(DC)をそのまま「軽機甲旅団」とし、騎馬竜騎兵連隊1個(ハーフトラック乗車の騎兵大隊2個)と偵察連隊を持つ「乗車騎兵旅団」と編合することでDLMが編成された。 DCRが「擬似的3単位編成」なのに対し、DLMは「完全な2単位編成」であり、より小規模の部隊編成ではあるが、偵察連隊があることから、より柔軟な部隊運用が可能であった。

ダンケルクの敗戦後に、第1・第4 DLCがDLMへと改編され、先よりも小規模ながらもそれぞれ第4・第7 DLMとなった：合計5個（第5・第6・第8は計画されただけで、実現できなかった）。

DLMの基本編成（2単位編成）

第1 軽機甲旅団=戦車大隊2個（第1大隊S35、第2大隊H39装備）

(1個大隊=2個中隊:1個中隊=2個小隊;4個中隊=8個小隊編制)

第2 軽機甲旅団（同上）

乗車竜騎兵連隊(RDP)=ハーフトラック乗車の騎兵大隊2個(騎兵科)

(1個大隊=2個中隊:1個中隊=2個小隊;4個中隊=8個小隊編制)

偵察連隊：AMD35装甲車20輌（5輌の1個小隊×2=1個中隊：2個中隊=1個大隊）

その他支援部隊（牽引砲兵・牽引対戦車砲・乗車工兵・通信・補給）

※DCRと同様に戦車大隊は4個であるものの、大量生産されていたS35及びH39装備と装備内容が異なる。「馬」から「自動車」に乗り換えた「自動車化騎兵」が2個大隊あり、偵察連隊をも独自に持っている。 通信・補給部隊(タンクローリー)は編制内にあり、独自に運用できた。なお、偵察連隊は、軍団偵察グループ：GRCAからの統合であり、1 CMRポイントを統合することになる。

フランス軍軽騎兵師団(DLC)

1939年9月の開戦時、騎兵師団から改編済みの軽騎兵師団：DLC 2個（本国内に第1・第2 DLC）があった。1940年2月、残っていた3個DCの全てが新たにDLCへと改編が予定されたものの、フランス国内戦開始時までにDLCへの改編ができたのは1個だけで、残りの2個が改編できたのはダンケルク戦後のことであった。ダンケルク戦でのDLMの崩壊後、シェルブル港経由で本国に戻り、再武装を受けてDLCとして再建されることもあった。

DLCの基本編成（2単位編成）

騎兵旅団（中隊数8）

胸甲騎兵連隊 = AMD装甲車2個中隊編成の装甲車大隊2個
(4個中隊)

竜騎兵連隊 = 戦車2個中隊編成の戦車大隊2個（第1大隊S35、第2大隊H39装備
(4個中隊)

自動車化騎兵旅団

装甲車連隊 = AMD装甲車12輛・H35戦車12輛（実質2個中隊：1個大隊）

騎馬竜騎兵連隊 = ハーフトラック大隊・オートバイ大隊
(4個中隊)

その他支援部隊（牽引砲兵・牽引対戦車砲）

フランス軍歩兵師団(DI)

フランス軍歩兵師団は、一部の砲兵部隊を機械化したのみで、ほとんどが「馬匹砲兵」であった。歩兵は、文字通りに「徒步」で移動した。各師団には馬匹の支援砲兵部隊が配属されていた。

フランス軍は第一次世界大戦の経験から「再び塹壕線が展開されるもの」と長年にわたって見なしていたことから、マジノ線要塞地帯の建設を進め、部隊運用上にも3つの問題点があった。一つ目は前線の各歩兵部隊への「命令伝達は伝令兵で充分」という意識でいたために無線通信部隊が配備されていなかった。二つ目は、独自の補給部隊も持たず、上位の軍団司令部に補給のすべてを頼っていたため、長距離の移動ができなかった。三つ目は、軍団司令部に偵察グループが配備され、歩兵師団には偵察能力が全くなかった。このため、「事前に計画された移動」はできても、「状況変化に対する対応力」は皆無に等しく、柔軟な部隊運用は全く望めなかった。

DIの基本編成（3単位編成）

第1歩兵連隊 = 「徒步歩兵大隊」3個（各大隊は3単位編制）

第2歩兵連隊 = （同上）

その他支援部隊（馬匹砲兵）

フランス軍自動車化歩兵師団(DIM)

1939年9月の開戦時、歩兵師団から完全改編済みの自動車化歩兵師団：DIM 5個と、不完全改編状態DIM 2個があった。なぜなら、「騎兵の機械化」が優先されたことにより、歩兵師団所属砲兵などの付属部隊を完全機械化はできたものの、歩兵連隊の完全機械化は一部でしかできなかった。完全編成済みのDIM部隊のほとんどがベルギー戦で失われてしまう。

DIMの基本編成（3単位編成）

第1乗車歩兵連隊 = ハーフトラック乗車大隊3個（各大隊は3単位編成）

第2乗車歩兵連隊 = （同上）

その他支援部隊（牽引砲兵・牽引対戦車砲）

※不完全編成状態DIMの移動手段は「徒步」であった。つまり、ゲーム上、移動力は通常のDIと全く変わらないことになる。DIMとしての移動力を保持したままでの戦力低下状態と見なすことはできず、初めから通常のDIとして登場すべきだ。

フランス軍要塞歩兵師団(DIF)

いわゆるマジノ防衛線の中でも、「要塞設備のなかった地域」に「塹壕線」を掘って防備に従事していたのがフランス軍要塞歩兵師団である。1939年9月の開戦時、要塞歩兵師団は5個あった。「フランス国内戦」が始まると、「要塞内部にあった部隊は移動しなかった」が、要塞外部にあった「要塞師団」は持ち場である「塹壕線」を離れてアルデンヌ地域に通常の歩兵師団として徒步移動し、ドイツ軍と対峙することになる。その結果、フランス軍のマジノ防衛線は一部が手薄となり、突破を許すこととなった。基本編成は一般歩兵師団と同様であった。

ゲーム上、これらの部隊をDIと区別してユニット化することは無意味である。部隊の質としては、DIと何も変わらない。むしろ「塹壕線」のルールを作成する方が良いだろう。

DIFの基本編成（3単位編成）

第1歩兵連隊 =「徒步歩兵大隊」3個（各大隊は3単位編制）

第2歩兵連隊 （同上）

その他支援部隊（馬匹砲兵）

フランス軍山岳歩兵師団(DIA)

1939年9月開戦時には国境守備山岳大隊として13個大隊があり、1940年初頭までに30個大隊に拡大され、3個大隊で山岳歩兵準旅団を形成し、山岳歩兵準旅団2個を持つ山岳歩兵師団3個と、山岳歩兵準旅団1個を持つ山岳歩兵師団4個、計7個師団に再編統合された。その内の山岳歩兵準旅団5個は2月末に「スカンジナビア遠征軍(CEFS)」に抽出された。

DIAの基本編成（3単位編成）

第1山岳歩兵準旅団 =「山岳歩兵歩兵大隊」3個（各大隊は3単位編制）

第2山岳歩兵準旅団（同上）

その他支援部隊（馬匹砲兵）

スカンジナビア遠征軍(CEFS)

1939年11月26日に始まったフィンランド＝ソ連間の冬戦争に対応して、1940年2月28日に「スカンジナビア遠征軍(CEFS)」が創設された。山岳歩兵準旅団(DLCh)5個、歩兵準旅団(軽歩兵師団：DLI)1個と支援砲兵などの付属部隊が指定された。同時に輸送に当たる艦艇も指定されたが、指定艦船では全陸上部隊を一度に輸送することはできず、複数のグループに分けて輸送される予定であった。

「1939年11月26日に始まったフィンランド＝ソ連間の冬戦争終結前に、平和裡に中立

国ノルウェーのナルヴィク港に接岸上陸し、中立国スウェーデンを通過して、紛争当事国フィンランドへと入り、ソ連軍と対峙する」というのが公的に示された目的であった。しかし、「中立国であるノルウェーのナルヴィク港を占領し、ドイツへの鉄鉱石輸出を阻止する」、「中立国であるスウェーデンの鉄鉱石鉱山を占領する」、「北部スカンジナヴィア全体の占領」の三つが実際の目的であった。推進者はイギリス海軍大臣チャーチルとフランス首相ダラディエであった。しかし、イギリス首相チェンバレンは「中立国の同意なしに部隊を進めることに反対」であり、ノルウェー政府もスウェーデン政府も国内通過を拒否した。外交交渉が進められている間の1940年3月12日、モスクワ講和条約が結ばれ、冬戦争が終結した。これにより、フランス国会でフランス首相ダラディエへの批判が高まり、3月21日にダラディエ内閣は総辞職に追い込まれた。新首相はポール・レノーとなつたが、ダラディエは国防相となり、そのままCEFSは解散されることなしに維持され続け、イギリス海軍大臣チャーチルとフランス国防相ダラディエの画策によって「ノルウェー侵攻のR4計画」が策定され、春にはCEFSによるノルウェー侵攻が確実実施となっていた。イギリス海軍による「アルトマルク号事件」に加え、フランス軍の「CEFSの維持」がヒトラーが「ヴェーゼル演習作戦」を決断する要素となつたことは間違いない。

「ヴェーゼル演習作戦」への対応部隊として、第1グループ：DLCh 2個が派遣された。輸送船がシェルブル港へと戻り、第2グループ：DLCh 1個(自由ポーランド軍)とDLI 1個がシェルブル港から派遣された。フランス軍には上陸用舟艇がなく、イギリス軍ALCやLCVPへ移乗してのノルウェー国内上陸となり、フランス軍の前線への到着はすぐには行かなかつた。加えて、「黄色の場合＝フランス侵攻作戦」が始まったことにより、第3グループDLCh 1個の派遣は中止となり、ナルヴィク周辺にあった部隊は全てフランス本国へと撤退した。

フランス軍軽歩兵部隊(DLCh)：山岳科

DLChの基本編成（3単位編成）

山岳歩兵準旅団 =「山岳歩兵歩兵大隊」3個（各大隊は3単位編制）

その他支援部隊（馬匹砲兵）

フランス軍軽歩兵師団(DLI)：歩兵科

DLIの基本編成（3単位編成）

歩兵連隊 1個 =「徒步歩兵大隊」3個（各大隊は3単位編制）

その他支援部隊（馬匹砲兵）

初期の自由ポーランド軍

ポーランドの敗北後、フランス国内で「自由ポーランド軍」の編成が始まった。ポーランド末期に中立状態にあったルーマニア経由でソ連軍による抑留から逃れたポーランド軍人がフランスへと渡航し、フランス在住のポーランド人を中心に設立したものである。編制の装備も「フランス軍山岳師団方式」であり、独立指揮下ではなくしにフランス軍の指揮下で「ポドパレ山岳旅団」と呼ばれた。CEFSに指定されて、ナルヴィク戦に参加。ナルヴィク撤退後、フランス国内戦に従事し、フランス降伏に伴つて「部隊解散」となる。しかし、多くの要員がイギリスへと渡り、「新たな自由ポーランド軍」の結成に参加することとなる。

ダンケルク脱出以後のフランス軍

ダンケルク脱出後のフランス軍はどこに向かったのだろう。ダンケルク脱出時には他のイギリス軍とともにイギリス本土を目指したことに、誤りはない。では、その後もそのままイギリス国内に留まったのだろうか。

この頃、シェルブル港やブレスト港がフランス国内に残るイギリス軍のフランスへの補給策源地となっており、イギリス軍増援部隊の受け入れも行っていた。ダンケルク脱出後のフランス軍は、シェルブル港経由で本国に戻り、再武装を受けてフランス国内の戦いに再出撃したのだ。結局、ドイツ軍の突破を受け、他のイギリス軍とともに再びシェルブル港やブレスト港からイギリス本土へ脱出し、自由フランス軍の中核が形成されることとなる。

また、CEFSとしてノルウェーにあった部隊は、帰るべき場所を失い、イギリス本土に留まり、同じく自由フランス軍の中核となる。CEFSにあった自由ポーランド軍は、拠点をイギリス本土に置くこととなつた。

機械化偵察グループ(GR)について

GRは、軍団司令部付属の軍団偵察大隊(GRCA：2個中隊4個小隊編制)として集約し、ベルギー進軍を予定する歩兵師団にのみ「装甲車装備の偵察大隊(GRDI：2個中隊4個小隊編制)」として残していた。いずれのGRも、ゲーム上の戦闘力は0.44(4/9)であり、1CMRに相当する。歩兵師団に付属部隊として追加配属されたGRDIは<1-6>BGでゲームに登場させるのが妥当であり、GRCAは1CMRとしてプールしておくのが妥当だろう。

フランス軍の編成を見る上で注意すべきこと

フランス軍の編成を見る上で注意すべきことがいくつかある。

まず第1に、国民性として部隊呼称は「フランス革命時代からの歴史的な呼称」を重視してそのまま使用おり、実質的な中身を正確に表現しているとは言えない。「騎兵師団」といっても、中身はもはや「馬」ではなく、「装甲車」や「戦車」の「機械化騎兵師団」である。更に、騎兵師団の拡大版が塹壕突破戦力としての「戦車師団」なのだ。

第2に、「Demi-Brigade」とは何なのか、は検討を要する。そもそも、「Demi-Brigade」をどうのうに翻訳すべきなのかが、一番の問題である。日本語に機械翻訳をさせると、「半旅団」あるいは「半個旅団」となり、「旅団の半分」と連想させられてしまう。これが「誤解」の元凶になっている。フランス語の「Demi-」を英語に翻訳した時、「Semi-」となるのだ。「Semi-」には、「Semi-automatic」を「半オートマ」と訳すこともあるよう「半旅団」あるいは「半個旅団」と訳したくなるのも理解できる。「Demi-Brigadeは歴史的な呼称」であり、他国の呼称に合わせて実際の規模を考えた時には「Regiment：連隊」に相当するものを「Demi-Brigade」と呼称しているだけで、実際の配下の大隊数は「2～3個大隊」である。「Semi-」には「半ば」だけでなく、「準拠した」という意味もある。このことから、「Demi-Brigade」を「誤解を生まない日本語」に翻訳する上では「旅団に準拠した部隊=準旅団」と翻訳するのが適切と考えた。

第3に、「騎兵科」を起源とする「フランス軍機械化部隊」の戦力評価には注意が必要だ。名称と実質戦力が他国と同等にはならない。「機械化旅団」と呼びながら「2個機械化大隊編成」がほとんどだ。「機械化連隊」と呼んでも、多くはその中身が「1個機械化

大隊編成」である。更に、「機械化大隊」と呼んでも、その中身は「2個機械化中隊編成」となる。つまり、「ドイツ軍は兵科にかかわらず3単位編制を基本」にしているのに、「フランス軍騎兵科部隊の基本編制は2単位編制を基本」にしているのだ。結局、「フランス軍機械化部隊」は、名称規模で同じでも、実際は「相対的にドイツ軍機械化部隊の2/3以下の戦闘力しかない」ことに注目すべきだろう。戦闘段階を考える上で、ドイツ軍もイギリス軍も、3個中隊=1個大隊=1戦闘力と見なして、1個中隊をその1/3である0.33戦闘力に相当させた。1個中隊の戦力低下後の戦力である0.16を小隊戦闘団としたが、これは0.33の1/2であり、厳密には1個小隊半の戦力である。厳密に1個小隊=1/9大隊にしてしまうと0.11でなければならず、ゲームにならないという判断からだった。しかし、フランス軍騎兵科は2単位編成であり、小隊は大隊の1/9戦闘力と見なすことを変えずに、2/9が中隊、4/9が大隊と積み上げることで、「戦闘力低下一覧表」上でのフランス軍騎兵科部隊の戦闘力を「小数で示す」のが他国と最も合わせやすい方法となった。この結果、フランス軍機甲部隊の戦闘力評価は驚くべきものとなった。例えば、戦車師団(DCR)は、6戦闘力ではなく、4.55戦闘力にしかならない、ということには誰もが驚くことだろう。

第4に、「歩兵科」を起源とするフランス軍歩兵部隊は、3単位編制だ。各師団は3個歩兵連隊を基本とし、歩兵連隊は3個歩兵大隊編成である。歩兵大隊は3個中隊編成であり、歩兵中隊は3個小隊編成だ。DLIやDLCh所属の歩兵準旅団も歩兵3個大隊編制となっている。

終わりに～「フランス軍戦力低下一覧表」において再現できないこと

ユニット上の戦闘力は整数で計算するのがこれまでの通例である。先述の通り、フランス軍騎兵科部隊の戦闘力を「小数あるいは分数」で計算するのが他国と最も合わせやすい方法となった。このような場合について、「ユニット上の戦闘力は整数へと切り上げ」た形で示し、「さらに戦闘力に下線を付ける」ものとした。実際の戦闘力は「戦力段階一覧表で小数で示されている」。同様に、「補給部隊や通信部隊の未整備を示すものとして、移動力に下線を付ける」ものとした。このような措置は、フランス軍以外にも必要な場合が考えられる(例えば、ポーランド軍など)が、現段階では未定である。「補給部隊や通信部隊の未整備」の影響はルールで定めるものであり、これもまた現段階では未定である。

補充ポイントを、機械化騎兵：CMRと、歩兵：MRと、二つに分離させた。両者では編制単位が異なり、用法も分ける必要があり、そのためのルールも必要となる。これもまた現段階では未定である。

増援表は明らかに修正が必要である。これもまた現段階では未定である。

今回の見直しで、「フランス軍ユニットの大幅な修正が必要なことは明らか」であり、加えて「新たなフランス軍ユニット数」も合わせて考えるべき事柄でもあり、「戦力低下一覧」だけでは解決できない。フランス軍新ユニットをどのように割り振るかは現在考慮中である。

追記：補充ポイントを「スタック価」として利用することを考慮し、第5版とした。

追記：「スカンジナビア遠征軍(CEFS)」について、追記/修整したことにより、第5-2版とした。